

循環型社会を目指して

限りある資源を有効に使い、循環させながら利用していく社会を循環型社会といいます。循環型社会の基本的な考え方として、3R (REDUCE、REUSE、RECYCLE) の取り組みを推進しています。

3Rの取り組みは、優先順位があるんだよ。

1 REDUCE リデュース

ごみを減らす

- マイバッグを利用してレジ袋は断る。
 - 過剰な包装は断る。
 - unnecessary 買い物をしない。
 - 使い捨てではなく、長期間使用できる品物を選ぶ。
- など、ごみになるようなものを減らす。

2 REUSE リユース

繰り返し使う

- 何度も使用できるリターナブル容器のものを選ぶ。
 - シャンプーや洗剤などは中身を詰め替えられる商品を選ぶ。
 - フリーマーケットを活用する。
- など、使い終わったものを捨てずに繰り返し使う。

3 RECYCLE リサイクル

再び資源として利用する

- ごみは分別して、資源化できるものは資源ごみの日に出す。
 - 購入する時はできるだけリサイクル商品を選ぶ。
- など、資源として使えるものはごみにしないで再び利用する。※

法律では、消費者が容器を分別するための「識別表示マーク」を容器に記載することを義務付けています。



さらに、消費者の取り組みとして、4Rや5Rもあるよ。

REFUSE (断る)

過剰な包装など、ごみになるものは断る。

REPAIR (修理して長く使う)

壊れたら、まずは修理して、長く大切に使う。

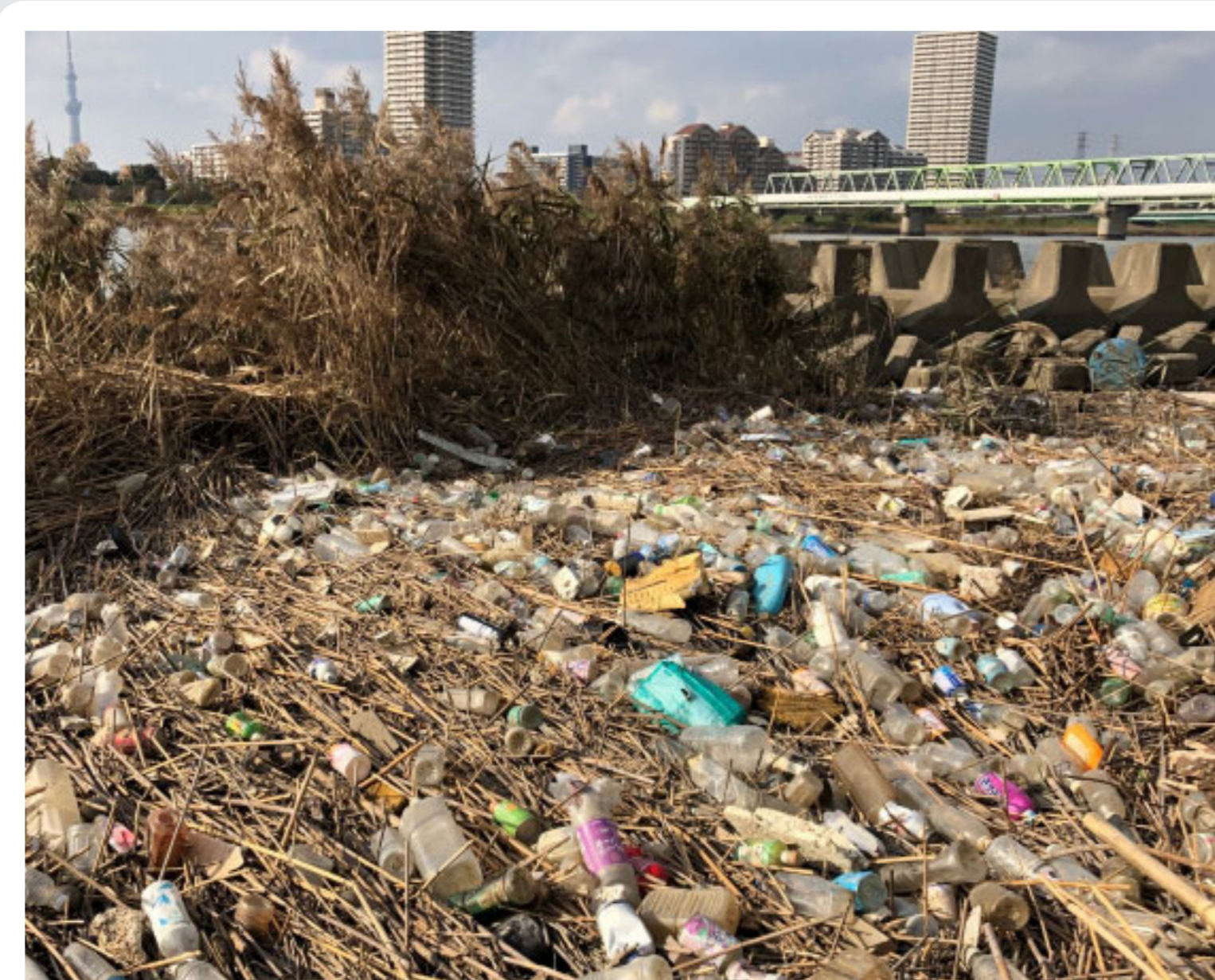
※ 循環型社会の形成には、リサイクルによって再商品化されたものを買うことも大切です。再利用の目安となるマークを紹介しします。



プラスチックごみが世界の海で問題に

この大量のプラスチックごみが、海の生物の命を奪っています。今までに、クジラ、ウミガメ、イルカ、海鳥などが、海ごみをエサと間違えて食べたことが確認されています。ビニール袋は消化されないため、生物の胃の中がビニール袋でいっぱいになり、エサが食べられなくて死んでしまったり、考えられています。他にもプラスチック製の袋や網に体が絡んで死んでしまったり、傷ついてしまったりする例が数多く報告されています。

プラスチックは軽くて丈夫な反面、軽いので、ポイ捨てなどにより、街中に散乱したごみが雨や風によって流されて河川に入り、海に流れ出てしまっています。海に流れ出たごみは、潮の流れや風で水面や水中を浮遊して遠くまで運ばれたり、海底に沈んだりしています。自然分解されないため、ずっと海に残ります。海に漂っているプラスチックは、紫外線や波の力で次第に小さくなります。5ミリメートル以下に小さくなったプラスチックは「マイクロプラスチック」と呼ばれます。このマイクロプラスチックによる海洋汚染が問題となっています。



荒川河川敷のプラスチックごみ

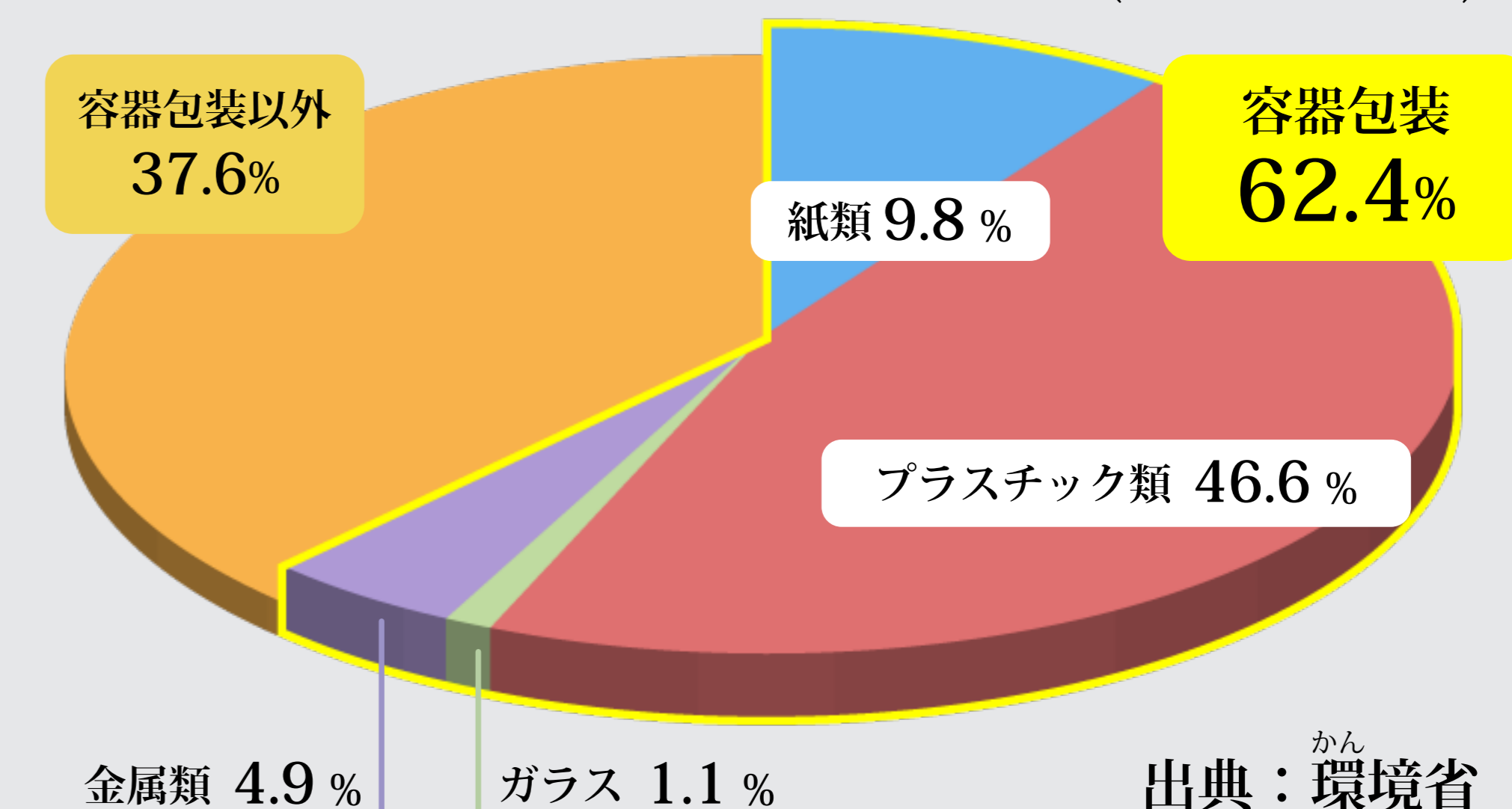


プラスチックが漂う海を泳ぐマンタ

便利な一方で、今、世界の海でプラスチックごみが問題になっています。2016年1月の世界経済フォーラムで「毎年800万トン以上のプラスチックのごみが海に流出しており、このままだと、2050年には海のプラスチックが魚の量を上回る」というレポートが発表されました。

家庭から出るごみのうち約6割は容器包装

容器包装廃棄物の使用・排出実態調査の概要 (平成30年度)



出典：環境省

日本の家庭では、毎日一人1キログラムのごみを出しています。このごみを容器包装が約6割を占めています。お店で購入するペットボトル飲料、牛乳、弁当、パン、菓子など、ほとんどの商品は容器に入っていたり包装されたりしています。これらの容器包装は、使い終わればごみになります。

東京23区の家ごみは、最終的に東京港内にある最終処分場に運ばれます。昭和の高度経済成長期から平成のバブル崩壊まで、「大量生産し大量消費して大量廃棄する」といった風潮の中、東京23区のごみは増える一方で、平成元年には490万トンにまでなりました。

現在は、事業所からのごみの回収の有料化やリサイクルを進めたことにより、23区のごみの量は減少してきています。しかし、東京港内にはこれ以上、処分場を設置するスペースはありません。



廃棄物埋立処分場 (東京都) 東京都環境局